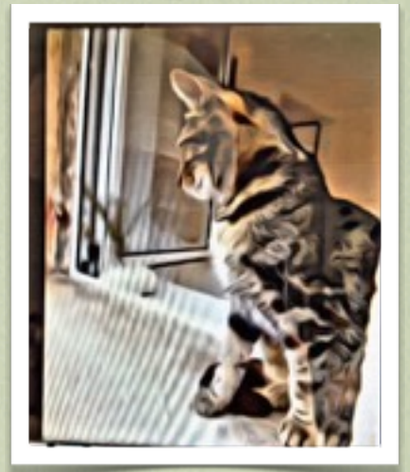
エミー
遊覧船ダックルズに乗る



1

緑の葉が生い茂る大きな木々に囲まれた細い道を進むと、かすかに甘い香りがただよい、ピンクのバラ、白いマーガレット、紫のラベンダーなど色鮮やかなお花が咲いている。さらにそこから奥へ進むと、石造りの細い通路の両脇に青い芝生の広がる明るい庭が続く。その先は砂利道になり、畑を耕すトラクター用のガレージがある。今日はみんなその前にそろっていた。

「さあさあ、みんな右足を出したら、次は左足よ。そうそう上手ね。さあ、あそこまで行ってみましょう」

ここのワイン生産農家で暮らしているアヒルの一家だ。二週間前にめでたく四羽のヒナが誕生してから、アヒルのお母さんはずっとヒナたちと一緒だ。今日は歩く練習をしている。

「ママ、歩けたよ」

「そうね、上手に歩けたわね。あらあら、アレスカ、そんなに遠くまで行っちゃだめよ。ママの近くを離れないでね」

四羽のヒナの名前は、オスのアレスカ、スネイル、バートそしてメスのエミー。一家はいつも一緒だった。この農家には、アヒルたちのほかに、ネコが一匹いた。名前はマルム。マルムはやわらか茶色い毛に黒の毛が混ざったメス猫で、お庭を自由に散歩したり、部屋の中で昼寝をしたりして過ごしている。時にはお庭から細い道へ抜けて、川辺まで歩いて行くこともあった。マルムは黄色いアヒルのヒナたちがちょこちょこ歩く姿をとてもかわいいと思っていた。自分の近くで小さな生命が誕生するのは、マルムにとってはじめてのことで、とてもすてきなことだった。マルムはもっと近くでアレスカたちの様子を見ようとした。

「ちょっと、ネコなんかが私たちの近くによらないでちょうだい」

しかし、マルムが近づいただけで、いつもお母さんアヒルはこのようにキーキー声をあげ、お父さんアヒルはくちばしでマルムをつっつこうとするのだ。

「かわいいアヒルの赤ちゃんたちを近くで見たいだけなのに」

マルムはさびしそうにつぶやくと、遠くからヒナたちの様子を眺めるしかなかった。

こうして二ヶ月の月日が流れ、ヒナたちはおとなのアヒルと同じ白い羽に生え変わり、大きくなっていった。それでも、お母さんアヒルとお父さんアヒルは子供たちの近くを離れなかった。子供たちのほうからマルムの近くに歩いて行ったときでも、お母さんアヒルのマルムへ対する冷たい言葉とお父さんアヒルの攻撃は変わらなかった。そんな様子を見て、エミーは聞いた。

「ねえ、ママ。どうしてネコさんに冷たくするの？」

「あら、エミー。ネコはとってもおそろしい動物なのよ。私たちとは見かけが全然違うでしょ」

お母さんアヒルは大げさに羽を動かして、大きな声で答えた。

「見かけ？」

「そう。私たちみたいな羽もないし、足も四本もあるし、体だってなんだか茶色っぽいでしょ」
「うん。でもあのネコさん、私たちを見るとき、ママやパパみたいにやさしい目をしてるわよ」
　お母さんアヒルはもっと大きな声で、顔をエミーに近づけて言った。
「まあ、エミーったら。ネコなんかと目をあわせたらだめよ」
「どうして？」
「ネコはそうやって優しそうなふりをしているだけなのよ。そうしてエミーを安心させて近づいて、エミーを食べちゃうかもしれないのよ。いい、ネコに近づいたりしたらぜったいにだめよ」
　お母さんアヒルはそう言い切ると、これ以上エミーに質問をさせないようにエミーを連れて小屋の中に入っていった。
　ある日のこと、アヒル一家がアヒルプールで水浴びをしていると、スネイルとバートがけんかをはじめた。
「おい、バート。今わざとぼくの目に水かけただろう」
「何を言うんだよ。そんなこと言ったら、スネイルこそさっきのごはん、ぼくが最後に食べようと思ってとっておいたキュウリ食べただろう」
「バートがなかなかキュウリ食べないから、嫌いなんだと思って食べてあげんたんじゃないか」
「ぼくはキュウリが好きだから最後にとっておいたんだ。ぼくのキュウリ返せよ」
　二羽はおたがいにくちばしでつつき合い、あばれまわったため、プールの水がほとんどなくなってしまった。
「こら、ふたりとも、プールの中でけんかしないの。はい、もう今日の水浴びはおしまいよ。みんな向こうのお庭でお昼寝しましょう」
　お母さんアヒルはそう言うと、みんなをプールから出して、庭の方へ歩いて行った。さっきまでけんかをしていたスネイルとバートも、仲良く並んですぐに寝てしまった。しかし、エミーはスネイルとバートがプールの中で動き回っていたためほとんど水が飲めず、のどがかわいていて眠れない。お母さんアヒルに水を飲みたいと言おうと思ったが、お母さんアヒルも疲れたように眠っていた。そこで、プールに戻って水を飲もうとひとりで歩いて行った。エミーがさっきの場所へ戻ってくると、残念なことにプールは片付けられていて、水が飲めるところがなくなっていた。
「こまったわ。私もうのどがかわいて苦しくなってきた」
　エミーはだんだん息苦しくなって、ハアハア息をして立ち尽くした。そこへマルムが通りがかった。
「あら、あなたのどがかわいているんじゃないの？」
　マルムは心配そうにエミーをみつめて言った。エミーはマルムがいることにおどろいて逃げようとしたが、体に力が入らずに動けなかった。
「こわがらなくても大丈夫よ。そうだ、私のお水がお皿に入っているからそれを飲んだらいいわ。こっちよ、ついてきて」

マルムは少し歩くと振り返り、エミーにやさしい笑顔をむけるとうなずいてまた歩き始めた。そしてまた少し歩いては振り返った。エミーはお母さんアヒルが言った、ネコはとてもおそろしい動物だということを忘れてはいなかったため、マルムについて行っていいのか迷っていた。でもマルムのやさしい目からは、とてもおそろしい動物とは思えず、何よりのどがかわいていたので、マルムのあとをついて行った。マルムはエミーがついてきているとわかると、そのままマルムの水飲み場へまっすぐ歩いて行った。

「さあアヒルさん、このお水飲んでいいのよ」

マルムは自分の水をエミーにすすめた。エミーは本当に飲んでいいのかどうか少し迷っていた。そんなエミーを見て、マルムはまず自分の水をおいしそうに飲んでみせた。

「ああおいしいお水。さあ、あなたもどうぞ」

マルムの満足そうな顔を見て、エミーも安心して水をたくさん飲んだ。

「ああ、おいしかった。ありがとう」

エミーは笑顔でマルムに言った。

「あなた本当にのどが乾いていたのね。あなたたちはいつもどこで水を飲んでいるの？」

マルムはたずねた。

「プールで水浴びをして、そのときにいっぱい水を飲むの。あとは、ごはんと一緒にお水が出るからそれを飲むのよ。だけど、今日は水浴びのときにお兄ちゃんたちがけんかしてあばれたから、ほとんどお水が飲めなかったの」

エミーはお母さんやお父さん、お兄ちゃんのような家族ではないネコと話ができることがとてもうれしかった。

「そうなの。あなたたちアヒルさんは川には行かないの？」

「かわ？」

エミーはマルムが言ったことがわからずに聞き返した。

「そうか、あなたはあの家から外に出たことがないのね。ここからあの細い道を通って右に曲がると川があるのよ。川には水が流れていて、あなたたちのようなアヒルさんやカモさんもよくそこで水を飲んだり泳いだりしているわよ」

「へえ、そんなところがあるのね。どうしてママは連れて行ってくれないのかしら。今度ママに聞いてみよう」

エミーはうれしそうに言った。

「でも、あなたのママはきっとあなたたちをこの家の外にはつれていきたくないんだと思うわ」

マルムは悲しそうな顔をしながら言った。

「どうして？」

「あなたの両親は、私があなたたちに近づくこともすごくいやがるじゃない。きっと私があなたたちに悪いことでもすると思っているのよ」

マルムが言うと、エミーはお母さんアヒルに言われたことをまた思い出して、困った顔をした。

「まあ、本当にそうなのね。フフフ」

　そんな正直なエミーを見て、マルムはほほえんだ。
「大丈夫よ。私はあなたたちに悪いことなんかしないわよ」
「ほんとう？」
　エミーはちょっと小さな声で聞いた。
「ほんとうよ。悪いことをするんだったら、あなたにお水をあげたりなんかしないわ」
「うん。でもママは、ネコさんは優しそうなふりをして安心させてから、エミーを食べちゃうかもしれないって言ったの」
「まあ、私がアヒルを食べるだなんて、そんなおそろしいことするわけないじゃない」
　マルムはおどろいて真剣な顔で言った。
「きっとあのお母さんアヒルも外の世界を知らないで大きくなったのね。そもそもネコっていう動物をわかっていないんだわ」
　マルムは少し怒った顔をしていた。
「あの、私もうもどらなくちゃ。私がここにいるところママにみつかったら、あなたがまた怒られてしまうわ」
「そうね。そうだ、私の名前はマルム。またいつもでここに遊びにいらっしゃいよ」
　マルムはやさしい顔にもどって言った。
「うん。私はエミー。きっとまた遊びにくる」
　エミーはそう言うと庭のほうへ歩いて行った。

2

エミーはそれからも、お母さんアヒルが寝ているすきをねらって、時々マルムに会いに行った。エミーはマルムの話を聞いてから、ずっと川のことが気になっていたのだが、お母さんに川に行きたいと言えば、どうして川のことを知っているのかとあやしく思われて、マルムと会っていることがばれてしまうかもしれないと思い、なかなか聞けずにいた。そんなとき、庭の芝生でみんなでおいかけっこをして遊んでいると、細い道が見えた。エミーはそれがマルムの言っていた、川にたどりつく細い道だとわかった。

「ねえママ、あの道の先に行ってみたいわ」

エミーはお母さんアヒルに言った。

「エミー、あそこの道から先には行ってはだめよ」

お母さんアヒルはエミーから道がみえなくなるようにエミーの前に立って言った。

「どうしてだめなの？ママは行ったことあるの？」

エミーはお母さんの横を通りぬけようとして体をずらしながら言った。するとまたお母さんも負けじとエミーの前へ体をずらして続けた。

「あの先にはとてもおそろしい世界があるのよ。だから行ってはいけないの。ママもそうやってママのママに言われて、行ったことはないのよ」

「じゃあパパは？パパは行ったことあるの？」

エミーは今度は、お母さんアヒルよりもエミーに甘いお父さんアヒルに向かって言った。

「パパは。。。」

お父さんアヒルはそこで言葉をとぎらせた。お父さんアヒルは、この農家のご主人がお母さんアヒルのために隣の農家からもらってきたアヒルだった。お父さんアヒルはご主人の車に乗ってここまで連れてこられてから、やはりこの農家の外には出たことがなかった。隣の農家にいたときも、今と同じように広い庭があり、水浴びもプールでしていたため外に出たことはなかった。しかし、子どもの前でここから外に出たことがないと答えるのは、父親としてかっこ悪いのではないかと思え、答えを考えていた。

「パパはもちろん行ったことがあるよ」

結局お父さんアヒルはうそをついてしまった。

「え、パパは外に出たことがあるのね。外には何があるの？」

エミーはお父さんアヒルにしがみついて聞いた。

「外には、おそろしい敵がいたんだ」

エミーはお父さんの答えが想像していたことと違っておどろいてしまった。

「え、てき？」

「そうだ。その敵はとつぜんパパの首にかみついてきたけれど、パパは首を大きくふって、その敵を追い払ったんだ」

「へえ、すごいパパ。その敵っていったいなんだったの？」

お父さんアヒルは頭の中で想像しながら答えた。

「その敵は、ネコだよ」

「え、ネコ？」

　エミーはおどろいて大きな声を出した。
「そうだ。ネコはね、本当におそろしい動物だ。パパは強いからネコをふりはらうことができたけれど、エミーのようにまだ小さな子どもはネコに近づいたりしたら何をされるかわからないんだぞ。だからお母さんの言うことをよく聞いて、お母さんが行ってはいけないというところにはぜったいに行ってはだめだぞ」
　お父さんアヒルは自分が父親らしい立派な発言ができたことで満足そうだった。
「ねえ、パパ。この細い道を行ってどこでネコに会ったの？」
　エミーは自分が聞きたかった川の話が聞けず、ネコがおそろしいということを言われてなっとくがいかなかった。お父さんアヒルはまだしつこく質問をしてくるエミーに今度はなんと答えたらいいのか渋い顔をして考えながら言った。
「この細い道の先には、またうちのような家があるだけだ。それ以外は何もない」
「え、そうなの？」
「そうだ」
「さあさあ、そろそろ夕ご飯の時間よ。エミーも質問はそれくらいにしてみんなあっちへ行きましょう」
　お母さんアヒルの助け舟にほっとしたお父さんアヒルは、大きくうなずいて率先して前を歩いた。エミーはとても困惑していた。マルムの言っていた、川というものが本当にあるのか、もしかしたらお父さんの言うように、ネコは本当におそろしい動物で、マルムもまだエミーをだましていて、いつかエミーを食べてしまうつもりなのか。
　翌日、エミーはまたマルムのところへ行った。マルムが本当はおそろしいことをたくらんでいるのかどうかはっきりさせたいと思い、お父さんアヒルから聞いたことを正直に話した。
「ねえ、マルム。本当はどっちなの？マルムはほんとうは私のことを食べようとしているの？」
　するとマルムはまじめな顔をして言った。
「エミーはもうみんなのところにもどったほうがいいわ」
　そしてくるりとエミーに背中を向けると、草むらへ入って行ってしまった。エミーにはマルムの後ろ姿がとても悲しそうに見えた。

2

3

あの日からエミーはマルムに会っていなかった。やっぱりマルムは怒ってしまったのだろうか。自分はマルムになんてひどいことを言ってしまったのだろう。マルムと一緒にお水を飲んだり、ときにはマルムのところでうとうとして、マルムがエミーの羽をなめてくれたこともあった。あんなにやさしかったマルムが、エミーを食べようとしているなんて、そんなことあるはずがない。自分はどうしてマルムを信じてあげることができなかったのだろう。エミーはずっとマルムのことが気になっていた。しかし、いつものようにマルムの水飲み場へ行っても、マルムの姿はなかった。

朝ごはんを食べおわり、アヒル一家は庭の芝生の上を散歩していた。すると、木のうしろからひょっこりマルムが姿をあらわした。

「マルム！」

エミーはマルムをみつけるとうれしそうに大きな声を出してしまった。マルムはエミーをみつめると、そのまま庭の奥へと歩いて行った。エミーは立ち止まってマルムの後ろ姿を目で追っていると、マルムは振り返ってまたエミーをじっとみつめた。そしてまた歩きはじめた。エミーははじめてマルムの水飲み場へ連れて行ってもらったときのように、マルムのあとを追って歩き始めた。それに気づいたマルムは庭のはしまでくると、細い道へ向かって走り始めた。それにつられるように、エミーも足を早めて細い道のほうへ歩いて行った。道に出ると、マルムが道の先で立ち止まってエミーの様子をうかがっていた。エミーが道にきたとわかると、マルムはまたそのまま道をまっすぐと走り、右へ曲がった。

「マルム、待って」

エミーはもう必死になってマルムを追いかけた。

エミーがマルムを追って細い道のほうへ歩いて行ったことを見ていたバートもまた、エミーを追って細い道へと歩いて行った。そしてそれを見ていたスネイルが続き、最後にアレスカが言った。

「パパ、ママ、エミーたちみんながあっちへ走って行ったよ」

「なんですって！」

お母さんアヒルは大きな声を出してあわてた。

「あなた、子供たちがあぶないわ。早くおいかけましょう。あなたにかみついたというネコにでもみつかったら、みんな食べられてしまうかもしれないわ」

「ああ、そりゃ大変だ」

こうしてアヒル一家はみんなそろって細い道を通り、右へ曲がってついに川にやってきた。

「これが、かわ？」

エミーは目の前に広がるきれいな景色に目をうばわれ、立ち止まった。

「うわー、すごい、水が流れているよ」

スネイルとバートもあとから追いつくと、川の方へ向かってどんどん歩いて行った。

「すごい、気持ちいい」
　スネイルとバートは川に入っていくと、器用に泳ぎ始めた。
「これはいったいなんだ」
　あとから到着したアレスカも、お父さんアヒルもお母さんアヒルもみんな、目の前に流れる大きな川に圧倒されていた。太陽の光が川面に反射してキラキラかがやき、水の流れる音がとても心地よかった。いつのまにかマルムの姿は見えなくなっていた。そこへ、とつぜん赤い帽子をかぶったアヒルがやって来て言った。
「さあ、早く乗ってちょうだい。あなたたちの席もあるわよ」
「なんだ、あなたは？」
　お父さんアヒルはおどろいて聞いた。
「あら、あなたたちもダックルズに乗るんでしょ、私はガイドのガーコよ」
　ガーコと名乗ったアヒルはアヒルの形をした遊覧船をさして言った。
「うわー、なにあれ。面白そう」
　またスネイルとバートが遊覧船に向かって歩き始めた。
「こ、こら、スネイル、バート、勝手にそんなところに行かないの」
　お母さんアヒルが追いかけると、さらに強引にガーコは言った。
「さあさあ、みんなもあっちに行きましょう。これから船に乗って、川のクルーズを楽しみましょう」
「まあ、すてき。あの船に乗って川の上に行けるのね」
　エミーは目をかがやかせて言った。
「そうよ、おじょうちゃん。楽しいわよ」
　エミーも船へ向かって走って行った。こうしてガーコにうまく誘導されて、みんな遊覧船に乗り、席についた。ガーコが船に乗ると、船はゆっくりと動き出した。川の上を吹く風が太陽と水の香りを運んできてくれて、とても心地良かった。
「はい、それでは今日はこれからこのアヒル型スペシャル遊覧船ダックルズが、みなさまをすてきな川の旅へとご案内します。ガイドをつとめさせていただきますのは、私アヒルのガーコでございます。どうぞよろしくお願いします」
「うわーい」
　エミーの向かいにはエミーたちと同じくらいの歳のカモの子供たちが二羽、お父さんカモとお母さんカモに挟まれて座っていた。ガーコがあいさつをすると、子供たちははしゃぎ、お父さんとお母さんは両側の羽をあわせて拍手をした。それを見て、アレスカも拍手をはじめると、スネイル、バート、エミーも羽をあわせて真似をした。お父さんアヒルとお母さんアヒルはまだ自分たちがどうしてよいのかわからず、顔をひきつらせてじっと座っていた。カモ親子の隣には、白鳥のおばあさんと黒鳥のおじいさんが寄り添って座っていた。ガーコのあいさつをにっこりとほほえんで迎え入れた。
「みんなダックルズに乗るのははじめてかしら？」
「はじめてー」

　カモの子どもたちが真っ先に答えた。
「そう、それじゃあまずはみんなに守ってもらいことをお話しするわね。この船が川を進んでいる間は、絶対にこの船から飛び降りたりしないでね。それから途中で友達のカモさんを見つけたりしても、船が進んでいるときに乗せたりしてはだめよ」
「はーい」
　子供たちは声をそろえて返事をした。
「はい。良いお返事でした。それではみなさん、まずは右側を見てください」
　ガーコが川の右側へ羽をむけると、みんないっせいに右側を見た。
「横にまっすぐ、緑の葉っぱがしげった小さな木が並んでいますね。あれはなんだかわかりますか？」
　ガーコが言うと、すぐにアヒルのお父さんが答えた。
「あれはブドウ畑だよ」
「そうです！お父さん正解」
「パパ、すごい！」
　エミーは大きな声でさけんだ。みんなに注目されて、お父さんはすっかりごきげんになった。アヒル一家が住む家のうらには、ワインを作るぶどう畑が広がっている。お父さんアヒルは、お母さんアヒルが子どもたちの面倒を見ている間、ご主人に連れられてブドウ畑へ行き、ブドウの木のまわりを歩き回ることがある。その間に、土にいる害虫を食べたりして畑仕事のお手伝いをしている。
「みんなブドウは知っているかしら？むらさきや黄緑色の丸い実がいくつもくっついている果物よ。甘くてやわらかい実もあれば、すっぱくてちょっとかたい実もあります。このあたりのブドウは、人間がワインという飲み物を作るのに使われています」
「ワインってなに？」
　カモの子どもに聞かれて、お父さんカモが困っていると、お父さんアヒルは言った。
「人間が飲むお水みたいな飲みものだよ。でもお水とちがって味があるんだ。とても楽しい気持ちになれるような魔法にかかってしまうこともあるちょっと危険な飲みものだから、おとなの人間しか飲めないんだよ」
「へえ。おじさん物知りだね」
　カモの子どもに自分の夫をほめられて、アヒルのお母さんもすっかりうれしくなっていた。
「はい、みなさん、今度は左側を見てください。はい、奥の方に人間の車がいっぱい停まっていますね。あれは何をしているのでしょうか？」
　またみんないっせいにガーコがさした方向を見た。
「あー、あれか」
　カモの子どもがあまりうれしくなさそうな声を出した。
「あら、あなたは良く知っているみたいね」
「あそこで人間たちがキャンプをしているんだってお父さんが教えてくれた」

　カモの子どもが言った。
「きゃんぷ？」
　アヒル一家は、子供たちだけでなく、お父さんもお母さんもそろえて声を出した。
「はい、アヒル一家さんはご存知ないみたいですね。あの車はキャンピングカーと言って、ベッドやキッチンなんかもついている車なんです。人間たちはあの車の中で寝泊まりして、川での休暇を楽しむんですよ」
「川での休暇ってどういうことをするのかしら？」
　アヒルのお母さんが興味津々で聞いた。
「川で泳いだり、バーベキューをしたり、畑のまわりをハイキングしたり、自然の中でのびのびと過ごすんですよ」
　ガーコはお母さん友達のような口調で答えた。
「でも人間の子どもたちが川でさわぐと、ぼくたちが泳ぐ場所が少なくなっちゃうんだ」
　カモの子どもが不満そうに答えた。
「あらまあ、それは残念ね。でも人間たちがバーベキューで食べたごはんのおこぼれをもらえたりするでしょう？」
　ガーコはにやにやしながら言った。
「うん、まあね」
　カモの子どもたちにとっては、食べ物はそれほどうれしいことではないようだ。
「あら、あなたたち。食べ物が手に入るということはとてもありがたいことなのよ」
　カモのお母さんが言い聞かせるように言った。アヒルのお父さんは、今度は出番がなく、聞いたことのない言葉が飛び出すのをただただだまって、感心して聞いていた。白鳥のおばあさんと黒鳥のおじいさんは、相変わらずにこにこしながらみんなの様子を見ていた。
「はい、みなさん、そろそろ本日のハイライト、白鳥宮殿のお話をしましょうね」
　ガーコがみんなをまとめるように言った。
「うわーい、はくちょうきゅうでん！」
　カモの子供たちは大きな声でさけんだ。
「はくちょうきゅうでんって何？」
　スネイルが聞いた。
「白鳥宮殿は今からずいぶん前に建てられた、白鳥さんの立派なお家なのよ」
　ガーコは説明を続けた。
「むかしむかし、川の左側サガン国には白鳥一族が住んでいて、それはそれは美しいお姫様がいました。ある日お姫様がいつものように川辺で水遊びをしていると、突然目の前にとても優雅な美しい姿の白鳥の青年があらわれました。その若者は、お姫様に言いました。　『自分は川のずっと上流に住むウガン国の王子です、ここ数ヶ月の間自分のお嫁さんを探して旅をしてきましたが、今日ようやくその方がみつかりました、姫、一目惚れしました、是非ぼくと結婚してぼくらウガン国一族の姫君となってください』」

「まあ、すてきね」
　カモのお母さんが言うと、カモのお父さんはちょっとムッとしてお母さんを見た。カモのお母さんはまじめな顔に戻って何も言わなかったかのような顔をした。
「ほんとうにすてき」
　今度はアヒルのお母さんも言った。アヒルのお父さんが何か言おうとしたとき、お母さんはつづけて言った。
「お父さんに会ったときのことを思い出すわ」
　アヒルのお父さんはうれしくなって、にやにやしながら下を向いた。
「それからすぐにサガン国のお姫様とウガン国の王子様の結婚が決まりました。結婚式ははじめにお姫様の家族のいるサガン村で行い、そのあとで王子様がお姫様を連れてウガン国へ戻ることになりました。王子様は一度ウガン国へ結婚の報告をしに戻り、お姫様はウガン村へ嫁ぐための身だしなみの勉強などをはじめました。しかし、お姫様は少しずつ不安になってきました。王子様が目の前にあらわれたときは、美しさにすっかり心が奪われてしまいましたが、本当は王子様がどんな白鳥なのかまったく知りません。そんな王子様と結婚して幸せになれるのでしょうか」
　カモの子供たちもエミーたちもみんなだまってガーコの話に夢中になった。
「そんなときはいつも、白鳥の女王様が言いました。『あんなに優雅で真っ白な羽の王子様なんだから、きっとあなたを幸せにしてくれるすてきな白鳥にちがいないわよ。安心しなさい』」
　アヒルのお母さんは大きくうなずいた。
「結婚式を間近にひかえたある日、サガン国で妙なうわさが流れました。お姫様が川辺で水浴びをする姿や、川の上を飛ぶ姿を、羽が真っ黒な鳥がじっとみつめていたというのです。それを聞いた女王様は、すぐにそのあやしい黒鳥をみつけだして退治するように王様から命令を出してもらいました。しかし、だれも黒鳥をつかまえることができないまま、結婚式の日をむかえてしまいました」
アヒルのお父さんは緊張してツバを飲み込んだ。
「晴れ渡った空から、真っ白い羽をはばたかせて白鳥の王子が優雅に舞い降りてきました。サガン国の王様も女王様もそろって王子様を迎えました。王子様にはクローバーをたくさん使って作られたかんむりが、お姫様にはシロツメクサをたくさん使って作られたかんむりがそれぞれ頭にのせられ、ふたりが結婚のちかいのことばを交わそうとしたそのとき、背後から黒鳥があらわれてさけびました。『お姫様、だまされちゃいけない。その白鳥はウガン国の王子なんかではない』」
「まあ、なんてことでしょう」
　アヒルのお母さんは羽でほほをおおいました。
「『きみたちをだましてこのサガン国をのっとろうとしているんだ。きみが結婚のちかいをした後で、王様や女王様、そして親族のみんなを殺すつもりなんだ。』黒鳥は大声で訴えます。お姫様はおどろいて白鳥の王子様から離れようとしました。し

かし、そこで女王様が声を荒げて言いました。『何を言っているの、この村をのっとろうとしているのはあなたでしょ。さあ、早くこのうすぎたない黒鳥を追い出してちょうだい』」

　ガーコはみんなの顔を見渡した。

「そ、それでどうなったの？」

　バートは早く話の先が知りたくて、ガーコをせかした。ガーコはにっこりほほえむと話を続けた。

「『そうだ、女王の言う通りだ。この黒鳥は悪者だ。早くこいつを始末するんだ。』急にあの品のよかった王子様が、きたない言葉づかいで血相を変えて大声を出したのです」

「こわーい」

　エミーが泣きそうな顔をして言った。

「そう、お姫様もすっかり王子様がこわくなってしまい、王様と女王様のもとに走りました。王様も娘がすっかりこわがっている様子を見て、いったん結婚式を中断しようと言いました。すると、白鳥の王子はとつぜん自分の頭のかんむりを乱暴にぬぎすてて、草むらの中にかくしていたナイフをつかんで王様たちのところに近よりました。『冗談じゃない。あと少しってところでとんだ裏切り者があらわれやがった。だがもうこうなったら結婚なんかどうでもいい。おまえたちみんなをここで始末して、おれさまがこの村の王様になってやる。』王子様は言いました」

「えーそんなことってあるかしら」

　アヒルのお母さんは、すてきな王子様だと信じていた真っ白な白鳥が悪者だとわかり動揺した。

「王子様はナイフを王様の首にむかってきりつけようとしました。しかし、そのとき黒鳥が王子様の首にかみついたのです。王子様は大声でさけんであばれました。『さあ、早く今のうちに逃げるんです。』黒鳥は王様たちに向かって言いました。しかし、黒鳥が王子の首から口をはなしたその一瞬で、王子は体勢をととのえ、今度はナイフを黒鳥にむかって振り下ろしました。『おまえよくも裏切ってくれたな。まずはお前からだ。』とその瞬間、『あぶない！』というさけび声と同時にお姫様が黒鳥の前にあらわれ、ナイフがお姫様の羽にささってしまいました」

「いやー」

　エミーが大きな声を出した。

「こうなったら、サガン村のみんなもだまって見ているわけにはいきません。みんなでいっせいにあばれる白鳥の王子をおさえつけました。それからこの白鳥は王様の命令で村のろう屋に閉じ込められました」

「お姫様は無事だったのかしら？」

　カモのお母さんが心配そうに聞いた。

「はい、お姫様はすぐに村のお医者様に治療してもらい、命は助かりました。しかし、羽をけがしたために飛ぶことはきない、結婚するはずだった王子がじつは国をのっとろうとしていた悪者だったというショックなできごとからなかなか立ち直る

ことができず、自分の部屋にとじこもって誰にも会おうとしなくなってしまいました」
「まあ、かわいそうに」
　アヒルのお母さんが言った。
「でも本当はお姫様にはひとりだけ会いたい鳥さんがいました」
「黒鳥さんね」
　エミーがかわいい声で言った。
「そう」
　ガーコがにっこり笑ってエミーを見てうなずいた。
「しかし、お姫様が黒鳥をかばってさされたあと、王子を名乗る白鳥がとらえられてから、誰も黒鳥の姿を見ていませんでした。黒鳥はどこに行ってしまったのでしょう。どうしてみんなの前から姿を消したのでしょう」
　ガーコがみんなに問いかけると、アレスカが答えた。
「その黒鳥はきっと、自分をかばったせいでお姫様がけがをしてしまったから、もうみんなの前に元気な自分の姿を見せられないと思ったんじゃないかな」
「でもそもそも黒鳥はどこからあらわれたんだろう。サガン国の鳥じゃないのだとしたら、やっぱりウガン国からきたのかな」
　カモの子どもが言った。
「はい、ふたりともなかなか鋭いところをついたわね」
　ガーコは先生のような口調で言った。
「ではそこの黒鳥のおじいさん、この黒鳥はいったいどこから来たのだと思いますか？」
　とつぜんガーコはずっとだまってすわっていた黒鳥のおじいさんに話をふった。すると、みんないっせいにおじいさんに注目した。
「その黒鳥は、ウガン国の王子と名乗る白鳥の仲間だったのじゃ。いや実際はしもべのような身だった。その白鳥と黒鳥は遠いところから自分たちの定住地区を求めてこのあたりに飛んできたよそものだった。ある日このあたりでサガン村をみつけると、とても住みやすそうな大きな家があり、空気もきれいでとても気に入ってしまった。しかしもともと自由に遊び回っていた白鳥は、サガン国の組織の仲間入りするのはいやだった。それならその村で一番えらい鳥になってやろうと考えた。そして川で水浴びをしていた、家族やまわりのものたちに大切にされている白鳥姫を見て、その姫様に近づき、自分は王子だとうそをついてその姫と婚姻を交わし、そのあとで王様や女王様たちを殺して自分がその国の王様になろうと考えたのじゃ」
　黒鳥のおじいさんがあまりにも流ちょうに物語を語るため、みんなすっかり話に引きこまれていった。
「ところが、白鳥が計画とおりに姫に近づいて婚姻の話が進んでいくと、黒鳥は何も知らずにだまされている姫様たちがかわいそうに思えてきたのじゃ。毎日しっかり嫁入りのための勉強をし、無邪気に水浴びをして川の上を気持ち良さそうに飛び回っている姫を見ているうちに、いつのまにか恋をしてしまったのじゃ」

　黒鳥のおじいさんが言うと、白鳥のおばあちゃんはとなりで少し照れくさそうに下を向いた。
「黒鳥は結婚式の前になんとか姫に本当にことを伝えようと思い様子をうかがっていたのじゃが、毎日姫の様子をのぞいているあやしい黒い鳥がいると評判がたち、サガン国の白鳥たちに追われるようになってしまったため、それから身をかくすしかなかった」
　そこまで話すと、黒鳥のおじいさんはガーコのほうを向いた。ガーコはそのままおじいさんの話を受けつぎ、続けた。
「そう、そして結婚式の日にあらわれて、お姫様が黒鳥をかばってさされてしまったというわけです」
「じゃあ、それからその黒鳥さんお姫様に会うことはなかったの？」
　スネイルが聞いた。
「いいえ、それから白鳥のお姫様は念願かなって黒鳥と会うことができました。お姫様と再会した黒鳥は、自分のせいでけがをさせてしまったこと、そして、王子だと名乗る白鳥がお姫様をだまそうとしていたことを知っていたのに、もっと早くお姫様に知らせることができなかったことなどをあやまり、お姫様の前から今度こそ本当に去ろうとしました。けれどお姫様は、白鳥の行動を止めてくれたことを感謝している、黒鳥がいなかったら今頃両親や仲間を失っていたと思うと、早く会ってお礼が言いたかったと言ったのです。そして黒鳥はそれから毎日お姫様に会いに行き、黒鳥のおかげでお姫様はすっかり元気になり、羽の傷も回復してまた飛べるようにもなりました。そしてふたりは結婚したのです」
「よかった」
　エミーがうれしそうに言った。
「はい、それではちょうどそのお姫様たちが暮らしていた白鳥宮殿のあるサガン国に到着しました。みんなここで一度ダックルズをおりて白鳥宮殿を見学しましょう。私が案内しますので、みんな私のあとについてきてくださいね」

　みんなが船からおりると、ガーコは先頭に立って歩き始めた。船がついた場所は草むらになっており、茂みに通路の入り口のようなものがあった。その中へ入って行くと、まわりが草でおおわれていてわかりづらくなっているが、白鳥が生活するにはじゅうぶんな大きさの、大きな三角屋根が特徴のかわいらしい宮殿があった。
「ここが白鳥宮殿です。中に入ってみましょうね」
　宮殿の入り口を入ると、居間や食堂があり、お姫様たちの寝室や子供部屋がつづいていた。
「白鳥さんってみんなこんなにすてきなお家に住んでいるの？」
「いいえ。今はもう誰も住んでいないのよ」
　バートが聞くと、ガーコはまた説明をはじめた。
「今からずっと昔の十二世紀頃、人間たちが敵からの攻撃を守るために川沿いの崖や町の丘の上にお城を築いていました。そ

して、それからだいぶ時が流れ、人間たちもお城を造ることはしなくなりました。でも、あるとき崖の上にあるようなお城に住みたいという女の子のために、職人が遊びでここにお城を造りました。その後このお城は使われなくなり、まわりに草も生い茂り、人間たちがこのお城に気づくことはなくなってしまいました。そしてこのあたりに白鳥の一族が村を作っていた頃、自分たちの王宮として使うようになりました。でもそれから白鳥たちも村という社会をもたなくなり、みんな自由に草むらや水辺で過ごし、季節ごとに居住地を変えたりするようになり、この宮殿は使われなくなりました。そして今はこうして観光で鳥たちが訪れるようになったのです」

　宮殿の出口が近づくと、ガーコがまたみんなに質問をした。

「さて、それでは最後に質問です。お姫様が結婚式をあげる前、そしてお姫様がさされてしまった後、黒鳥はいったいどこにかくれていたと思いますか？」

4

黒鳥がどこにかくれていたか、それはきっと草むらのどこかではないか。しかし、このあたり一帯で白鳥が団結して探せば、羽の黒い黒鳥をみつけることは簡単かもしれない。では白鳥が普段は近づくことのない、ここから離れた場所で身をひそめていたのだろうか。アヒル一家もカモ一家もみんなそれぞれ意見を出し合い考えていた。

「みなさん、わかりましたか？」

ガーコはなんだか楽しそうな口調で言うと、庭へつながるドアの前に立った。

「あら、あれなんだろう？」

カモの子どもが、ガーコの後ろのドアの下のほうをさして言った。この宮殿は、すべて人間の子どもが使えるくらいの大きさで作られている。ここまでの宮殿の見学コースはすべてドアが開かれていたため気づかなかったが、ガーコのようなアヒルやカモがドアを開けるには、取ってが高すぎてむずかしい。ところが、ガーコがドアの前に立つと、ドアの下のほうにちょうどガーコでも通れるような小さな窓のようなものがついていた。

「ガーコさん、このドアの向こうはお庭ですよね？」

アヒルのお父さんが聞いた。

「そうですよ。ではみんなでお庭へ行ってみましょう」

ガーコはそう言うと、小さな窓をくちばしで軽く押した。すると窓はすぐに開き、ガーコはそこをとおって庭に出た。

「ね、便利でしょ。カモさんもアヒルさんもここを通ってきてください。白鳥さんと黒鳥さんは、ドアを開けて庭に出てくださいね」

ガーコがドアの向こう側から言うと、カモとアヒルのみんなは楽しそうに小窓を押して庭へ出た。みんなが行ってしまうと、黒鳥のおじいさんがドアの取ってをくちばしで押して、ドアをあけて庭に出た。

そこには芝生の広がった庭があり、色とりどりの花が咲いていた。そして花に囲まれるようにして、やはり三角屋根のかわいい木造の小さな家があった。

「あれはだれのおうち？」

アレスカが聞くと、黒鳥のおじいさんが答えた。

「ネコの家じゃよ」

「ネコ！」

アヒルのお父さんとお母さんはとつぜんいやなものに出会ったような顔をして大きな声で言った。白鳥宮殿として使われる前、職人が子ども用のお城として作ったとき、職人の子どもはネコが大好きで、ネコの家も一緒に作ってほしいとお父さんにせがんだ。その後、白鳥がここを宮殿として使っていたときも、やはりどこかのネコがこの家を自分の家として使っていた。

「黒鳥はネコの家でかくまってもらっていたのじゃ」

「かくまってもらうだなんて、ネコにつかまっていたんじゃないですか？」

　アヒルのお母さんはどうしてもネコを悪者にしたいような言い方だった。
「ネコはわしら鳥たちの気持ちをよくわかってくれるかしこい動物なのじゃよ。結婚式の前にあやしい黒い鳥をつかまえろという命令が出て、国中の白鳥が黒鳥のことを危険な悪い鳥だと思っていたけれど、ネコは黒鳥が姫をだますことがつらくなって姫を助けようとしていることを察し、黒鳥がつかまらないよう自分の家に招き入れたのじゃ」
　黒鳥のおじいさんはまたおだやかに話し始めた。
「そして、姫が白鳥にさされた後、黒鳥がみんなの前から姿を消し、どこか遠いところへ飛んで行こうとしたとき、ネコは、このまま姫を見捨てて去ってしまっていいのか、姫の様子が気にならないのか、と黒鳥に言い、だまって黒鳥を自分の家に呼んだのじゃ。ネコは特に、ああしたほうがいいなどと口出しせずに、黒鳥の気持ちが落ち着くまでそっとしておいた。自分のごはんや水を黒鳥にもわけてあげ、そして時々姫の様子を黒鳥に話して聞かせた。ネコはあのネコ窓を使って宮殿の中に入り、白鳥たちとも仲良くしていたのじゃ。白鳥の王様や王女様たちは、まさか探している黒鳥が自分たちの宮殿の敷地にいるとは考えもしなかったから、みつかることはなかった。このこともネコははじめからお見通しだったのじゃよ」
「へえ、ネコさんは頭がよくて、やさしいね。ぼくもネコさんと友達になりたいな」
　カモの子どもがカモのお父さん、お母さんを見て元気よく言うと、ふたりともにっこりとうなずいた。
「そう。だけどお姫様がすっかり元気をなくしてしまって、黒鳥に会いたがっているというのに、黒鳥がなかなかお姫様に会いにいこうとしないので、ネコはあることを思いつきました」
　またおじいさんからガーコへと語り手が変わっていた。
「ある日ネコは、具合が悪いとうそをついて黒鳥に川の水をくんできてほしいとたのみました。黒鳥は白鳥のみんなが寝静まったころ、こっそりとネコの家から出て川へ水をくみに行きました。するとそこには、水浴びをしていたお姫様がいたのです。ネコは誰にも会いたがらないお姫様が、夜になって水浴びをしていることを知っていたのです」
「あら、ネコさんたらわざと黒鳥がお姫様に会えるようにしむけたのね」
　カモのお母さんがうっとりした表情で言った。
「白鳥のお姫様がいることにおどろいた黒鳥は、いそいで逃げようとしました。でもお姫様もすぐに黒鳥に気づいて声をかけたのです。黒鳥はまず素直に自分がしたことを謝り、お姫様はそんな黒鳥にお礼を言って、ふたりの心は通い合っていったのです」
　ガーコはとてもあたたかい笑顔をつくって言った。黒鳥のおじいさんと白鳥のおばあさんは静かにみつめあって、ほほえんでいた。
「ではみなさん、この白鳥宮殿の最後の部屋を見に行きましょう」

ガーコがネコ窓を通って中に戻ると、みんなも続いて部屋の中に入って来た。
「ここはスワンの間とよばれる部屋です。白鳥のお姫様と黒鳥の王子様が、夫婦仲良く過ごした部屋なのです。あそこにかけられている絵が、そのお姫様と王子様です。ある日人間の絵描きが、川でみかけたとても仲の良い二羽の姿をかいたところ、あまりにも白鳥がその絵をほしがっているように見えたので、その絵を白鳥に渡してくれたのだそうです」
ガーコはそう言うと黒鳥のおじいさんと白鳥のおばあさんに目で合図をし、絵の前からさがった。すると、おじいさんとおばあさんが絵の前に進み出て話始めた。
「今日もすてきなお話を、アヒルさんやカモさんに伝えることができましたよ、ひいおばあちゃん」
白鳥のおばあさんが絵の中の白鳥に語りかけた。
「やっぱりガーコさんのガイドは一番だな、ひいおじいちゃん」
今度は黒鳥のおじいさんが絵の中の黒鳥に言った。そんな様子を見て、エミーがおばあさんに聞いた。
「白鳥のおばあちゃんたちはどうしてここに住まないの？」
すると、おばあさんがやさしく答えた。
「私たちは、いろいろなところを旅して、いろいろな鳥や動物、人間と出会って過ごしたいのよ。これまでもいろいろな場所へ行って、たくさんの動物や人間たちに出会い、一緒に楽しいことを経験して、そして助けられて来たの。でも、必ずこの時期にはここに戻って来て、ひいおばあちゃんとひいおじいちゃんにこういうことがありましたって報告することにしているの」
「もうすっかり年寄りだけど、まだまだ旅を続けるつもりじゃよ」
黒鳥のおじいさんが白鳥のおばあさんの肩に自分の羽をのせて言った。

宮殿を出ると、またみんなはダックルズに乗り、もとの場所へ戻った。
「これで今日のダックルズの旅は終了です。最後に、このダックルズのことを少しお話しさせていただきます。この船は、私の家主のご主人が作ってくれました。川をクルーズしながらたくさんの世界を見せてくれました。そして、私はそのすてきな世界を、ほかのたくさんの鳥たちとも一緒にながめたいと思い、遊覧船ダックルズのガイドをはじめました。この帽子は、奥さんが私のために作ってくれました。今日はみなさまに、川の旅をとおしてすてきな世界を楽しんでもらえましたら、私も大変うれしいです。そしてまた是非、お友達も誘ってダックルズに乗りにきてくださいね。ではみなさま、最後までお付き合いいただきありがとうございました」
ガーコが丁ねいに頭を下げると、みんなでいっせいに拍手をして言った。
「ガーコさん、楽しい船の旅をありがとう」

　船からおりると、スネイルが待ちきれないようすで言った。
「パパ、ママ、もうちょっとここで泳いでもいいでしょ？」
「そうね、とても気持ちいいからみんなで泳ぎましょうか」
　アヒルのお母さんもすっかり川が気に入ったようだった。みんなで川のほうへ歩いていると、草かげからマルムがあらわれた。
「マルム！」
　エミーがマルムを呼ぶと、マルムはエミーのほうへやってきた。
「エミー、ガーコさんとの遊覧船ダックルズの旅は楽しかった？」
　マルムは笑顔で言った。
「あら、あなたどうしてそのことを」
　アヒルのお母さんはまたいつものようにマルムに冷たくあたろうとしたが、途中で言葉をとぎらせた。マルムは、今度はアヒルのお母さんとお父さんのほうを向いて言った。
「あひるのおばさん、おじさん、私はエミーたちに悪いことをしたりなんかしないし、もちろん食べたりなんかしないわ」
　マルムにはっきりと言われて、お父さんとお母さんは気まずそうな顔をした。
「ねえママ、これからもマルムと一緒に遊んでいいでしょ？」
　エミーが聞くと、お母さんは言った。
「そうね、マルムさんのおかげでいろいろなことを勉強させてもらったわ。ありがとう。そして、これからも子供たちをよろしくね」
　それからアヒル一家はみんなそろって思いきり川で泳ぐと、細い道を通ってお花の咲く庭へ戻って行った。